

# 幻想パート2



どちら側からも締められて、二柄の表情が楽しめる京山のオリジナル袋帯、『双図全通』に新しい帯が誕生しました。

前回の『幻想』は粋なお洒落を強くイメージして創作したために、カジュアルな装いにこそ生きる帯となりました。続編となるこのパート2では、活躍の場を移してフォーマルシーンで映える作品を創作しました。

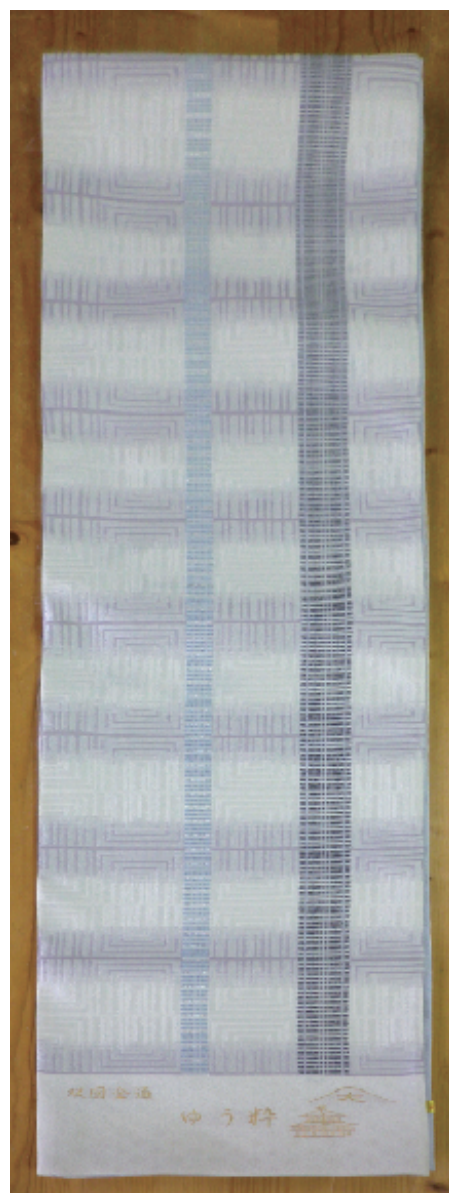
織りは三重錦と称される揃み織を用いており、大変美しい透け感が表現出来ております。揃み織は、振織（もじりおり）ともよばれ、紗、紹、羅の3種類がありますが、その三種の技法を組み合わせたものに三重錦の名が与えられました。

紗は緯糸（よこいと）1本ごとに隣同士の2本の経糸（たていと）を1組として揃ませて織り上げてゆきます。紹は奇数（3本、5本、7本）段の平織りまたは綾織りを組織したあと、隣同士の2本の経糸を揃めさせ、繰り返している組織です。羅は宇須波多（うすはた）とも呼ばれます。紗・紹は隣同士の2本の経糸が1組となって揃っていますが、羅では3本以上の奇数の経糸が互いに揃っています。

いずれも絡ませた経糸で組織に透きと立体感が生まれ、軽やかでありながら複雑な味わいを持つ織り柄が生まれます。

採用した色もあくまで気品があり、薄色ながらも印象的な色彩にこだわりました。京山の偏光箔糸をここはという位置に配して、あなたの心の輝きを奥ゆかしいながらにきちんと表しています。

揃み織には紗、絹、羅の3種類がありますが、その中で最も複雑な物が羅であり、そして最も古い歴史を持っています。仲哀天皇9年新羅よりの貢物として、はじめて伝わったと日本書紀に記されていますが、本格的には4世紀前半ころから伝わりはじめ、5世紀には織ることが出来たようです。622年(推古天皇30(飛鳥時代))にできた《天寿国繡帳》に用いられ、また奈良時代には最も羅の製織が盛んであったろうことが、正倉院の遺品の多さからも知ることが出来ます。しかし鎌倉時代に入ると皇室の力が衰えるに従い、羅も次第に姿を消していきましたが、16世紀に入って明から紗の織法が伝えられ、羅に変わって織られるようになりました。



## 京山 馬くいく

帯裏には九頭の左馬が一条で十二回織り込まれています。遠く江戸時代から、【九頭馬の図】は、高売、出世、縁談、蓄財、勝負事、健康、夫婦仲、農漁業、受験、と九つの上昇運を象徴するといわれています。

左馬は、その勢いすさまじく、よく跳ね風の如く疾駆することから「他より秀でる」といわれ、古来、開運出世、家運隆盛の福馬として珍重されたといわれます。

「馬九行く(=上手くゆく)」、の語呂合わせの如く、何事も大願成就に繋がる、おめでたい縁起物として愛されてきました。

